

ネット社会という船に乗って 44

心は本当にコントロールできるのか

文 佐渡島庸平

text by Yohei Sadoshima

「心が折れる」

この言葉は、すごく普遍的なもののように思える。しかし、実はまだ使われ出して30年ほどしか経っていない。さらに一般的に使用されるようになったのは2010年ころかららしい。しかも、使い始めは、プロレスラーの神取忍のインタビューだというから、驚いてしまう。

「心」というものへのイメージが、日本においてこの数十年で変わっているのだろう。「折れる」という具体的な行為の言葉がしっくりくるということ、は、「心」というものを昔の人よりも具体的なものとして捉える人が増えたのかもしれない。

「心が折れる」という言葉が、心を表す表現としてびつたりだから、世に広まっていったのか？それとも、このような言葉が存在するから、心が折れるということを我々は感じてしまうのか？

心とか魂は、ずっと人には理解できないものだった。しかし、科学はなんでも計測して、捉えようとしていく。心理学が学問になり、心の動きを実験で捉えようとしていった。それにより、心が解明されていっているようにも感じるが、心を計測可能な具体的なものだと捉えるようになっていただけともいえるかもしれない。

心が具体的なもので、操作可能なものであれば、確かにコントロールできるかもしれない。しかし、心は本当にコントロールできるのか。

例えば、「眠り」。私は眠る、と言う。私は、主体的に眠ると文章上では言う。では、実際はどうか。眠りたいと思ったら、すぐに寝られるわけではない。どちら

かというと、眠りは、自分ではコントロールできない。そこで僕は同じように言葉を調べた。昔の人は、眠りをどのように表現したのかと。

今の日本語は、能動態、受動態で表現される。しかし、昔は、中動態という表現形態があったらしい。「眠りが私にやってくる」というニュアンスの表現があったという。確かに、この表現はしっくりくる。眠りは、自分ではコントロールできなくて、あちらからやってくる感覚がある。

私は、場であり、眠りが私を通りすぎる。成功や愛も、私を通りすぎるものであり、私にどうにかできるものではない。

それを私たちは、主体的にコントロールできると思いすぎている。

心が折れる、というのでも、心を主体的にコントロールできるものと捉えているから、生まれた言葉のように感じる。折れないように工夫したり、鍛えたりできると。

しかし、もし中動態的に心を捉えたら、どのようになるだろうか？

心が場でしかなく、さまざまなものがある場所としていく。辛く、しんどいものは、その場にとどまる時間をどうやったら短くできるのか？

心地がいい感情や出来事には、どうやったら長くとどまってもらえるのか？

今、社会でいわれている「心」というものは、科学という宗教を信じすぎている現代社会が生み出した幻想ではないのか。そんなことを「心が折れる」の語源から考えた。



Profile

株式会社コルク 代表取締役
2002年講談社入社。週刊モーニング編集部にて、『ドラゴン桜』（三田紀房）、『働きマン』（安野モヨコ）、『宇宙兄弟』（小山宙哉）などの編集を担当する。2012年講談社退社後、クリエイターのエージェント会社、コルクを創業。著名作家陣とエージェント契約を結び、作品編集、著作権管理、ファンコミュニティ形成・運営などを行う。従来の出版流通の形の前にあるインターネット時代のエンターテインメントのモデル構築を目指している。